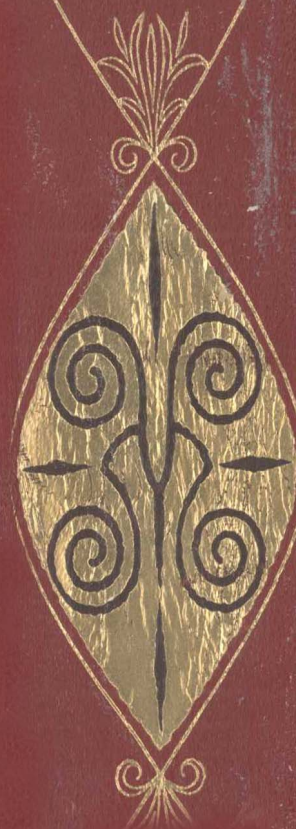
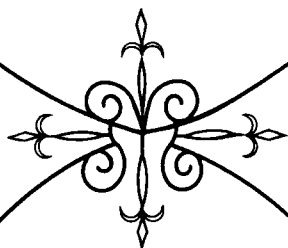


三島由紀夫  
全集



# 三島由紀夫全集



19

小 説

XIX

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳  
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

# 三島由紀夫全集第十九卷

昭和四十八年八月二十日印刷

昭和四十八年八月二十五日発行

著者 三島由紀夫

発行者 佐藤亮一

装幀者 杉山寧

# 三島由紀夫



発行所株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一

電話東京(〇三)二六〇一一一 振替東京八〇八

定価二五〇〇円

第四回配本(全35巻・補巻1) 落丁本・乱丁本はお取替えいたします

Copyright © 1973 YOKO HIRAOKA Tokyo Japan

三島由紀夫全集 第十九卷 目次



曉の寺 (豊饒の海・第三卷)	.....	七
天人五衰 (豊饒の海・第四卷)	.....	三六
解題	.....	六五
校訂	.....	六五



三島由紀夫全集 第十九卷 小説 (19)





豊饒の海  
(第三卷)



曉  
の  
寺



## 第一部

### 一

バンコックは雨期だつた。空氣はいつも軽い雨滴を含んでゐた。強い日ざしの中にも、しばしば雨滴が舞つてゐた。しかし空のどこかには必ず青空が覗かれ、雲はともすると日のまはりに厚く、雲の外周の空は燦爛さんらんとかがやいてゐた。驟雨の來る前の空の深い豫兆にみちた灰黑色は凄かつた。その暗示を孕んだ黒は、いちめんの緑のところどころに椰子の木を點綴てんてつした低い町並を覆うた。

寺の曉

そもそもバンコックの名は、アユタヤ王朝時代、ここに橄欖樹が多かつたところから、バーン(町) コーク(橄欖)と名付けられたのにはじまるが、古名は又、天使都エンジェルシティと謂つた。海拔二米に満たない町の交通は、すべて運河にたよつてゐる。運河と云つても、道を築くために土盛りをすれば、掘つたところがすなはち川になる。家を建てるために土盛りをすれば池ができる。さうしてできた池はおのづから川に通じ、かくていはゆる運河は四通八達して、すべてがあの水の母、

ここの人たちの肌の色と等しく茶褐色に日に照り映えるメナム河に通じてゐた。

市の中心部には、露臺のついた三階建の歐洲風の建築があり、外人居留地には二、三階の煉瓦造りも多かつたが、この町のもつとも美しい特色をなす街路樹は、道路改正のためにそこかしこで伐り倒され、舗装道路が一部に出来かけてゐた。のこる合歡の並木は、烈日をさへぎつて深々と道の上におほひかぶさり、黒い紗のやうな木蔭の喪を布いてゐたが、暑さにしなだれた草は雷鳴を伴つた驟雨のあとでは、俄かに蘇つて凍々しく葉末を反らした。

町の股賑は南支那の或る都市を思はせた。横うしろの幌を外した二人乗りの三輪車が無數に往來し、時にはバンカッピ周邊の水田から、鴉を背中にとまらせたまま水牛が牽かれて通り、黒い輝やかしい汚點のやうに、癩の乞食の光る皮膚が物かげに在つた。男の子たちは全裸で走りまはり、女兒は金屬製の蛇腹の覆ひを股間につけてゐた。めづらかな果物や花は朝市で賣られた。支那人町の金行の店頭には、簾のやうに懸け列ねた純金の鎖が燦爛としてゐた。

しかし夜になると、バンコックの町は、ただ月と星空だけに委ねられた。自家發電のできるホテルはさておき、透昇電壓器のある金持の家だけが、町なかのところどころにお祭のやうに光りを放つてゐた。多くはランプを使い、蠟燭を用ひた。川ぞひの軒の低い民家では、どの家も、佛座の一本の蠟燭で夜をすごし、佛像の金箔だけが竹簀の床の奥におぼめてゐた。太い茶いろの線香をその前で焚いた。對岸の家々の蠟燭の火が川へ落すゆらめく灯影は、時折とほる樽漕ぎの舟影に遮られた。

去年、すなはち昭和十五年に、シヤムはその國號をタイと革めた。

——バンコックが東洋のヴェニスと呼ばれるのは、結構も規模も比較にならぬこの二つの都市の、外見上の對比に據つたものではあるまい。それは一つには無数の運河による水上交通と、二つにはいづれも寺院の数が多からである。バンコックの寺の数は七百あつた。

縁をつんざいて聳えるのはみな佛塔であり、暁の光りを最初に受け、夕日の反映を最後までとどめて、日のあるあひださまざまに色を變へた。

小寺院ではあるが、十九世紀にラーマ五世チュラロンコーン大帝が建立した大理石寺院は、もつとも新らしい華麗な寺である。

當今のラーマ八世、アナンダ・マヒドン陛下は、昭和十年、御十一歳で位に即かれたが、間もなくスイスのローザンヌへ留學されて、御十七歳の今も彼地で勉學にいそしんでをられた。御留守のあひだに、ルアン・ピブン首相は獨裁の權力を得、形だけ攝政府が諮詢してゐた。攝政は二人置かれた。第一攝政アチット・アバー殿下はいはば飾り物で、第二攝政ブリディ・バノムヨンが攝政府の實權を握つてゐたのである。

お暇な上に崇佛の念の篤いアチット・アバー殿下は、しばしば各所の寺院に參詣されたが、或る夕刻に、大理石寺院へおいでになる旨が達せられた。

寺院はナコン・パトム・ロードの合歡の並木に挟まれた小川のほとりにあつた。

一對の石造の馬に護られた大理石の寺門は、古代クメール様式の白い焰の結晶のやうな冠飾を持ち、赤さびた門扉をひらいてゐた。門からまつすぐに本堂へ向ふ甃の道の左右には、エメラルドいろに光る芝生の央に、古代ジャワ様式の一對の東屋風の小閣があつた。芝生には丸く刈り込まれた灌木が花咲き、小閣の軒には焰を踏まへた白い獅子が躍つてゐた。



本堂前面の印度大理石の白い圓柱と、これを護る一對の大理石の獅子と、ヨーロッパ風の低い石欄とは、同じ大理石の壁面と共に、西日をまばゆく反射してゐた。しかし、それはただおびただしい金と朱の華文を引立たせるための、純白の畫布にすぎなかつた。ポインテッド・アーチ形の窓々は、内側の紅殻をのぞかせながら、その窓を包んで燃え上る煩瑣な金色の焰に圍まれてゐた。前面の白い圓柱も、柱頭飾から突然金色燦然とした聖蛇の蟠踞する裝飾に包まれ、幾重にも累々と懸る朱い支那瓦の反屋根は、鎌首をもたげた金色の蛇の列に縁取られ、越屋根のおのあの尖端には、あたかも天へ蹴上げる女靴の鋭い踵のやうに、金いろの神經質な蛇の鷗尾が、競つて青空へ跳ね上つてゐた。これらすべての黄金は、切妻に遊ぶ鳩の白も際立つほどに、熱帯の日光にむしろ暗く輝やいた。

しかし、次第次第に憂色の深まる空へ、何事かに愕いて、群立つときの白鳩たちは、煤のやうに黒くなつた。寺の鋸りに繰り返されてゐる焰の意匠の、その金色の焰の煤が鳩なのだつた。庭の數株の椰子は、突兀と、おどろいて立ちすくんだやうに見え、この「樹の噴水」は弓なりになつて、天へ縁の繁吹をいくつもひらいてゐた。

植物も動物も、金屬も石も紅殻も、光りの裡に混淆し融和して躍つてゐた。玄關を護る一對の白い大獅子でさへ、その大理石の鬘のさまは向日葵に他ならなかつた。その種子のやうな齒は、大きくカッとひらいた口のなかにぎつしりと並び、獅子の顔は、すなはち、怒りを發した白晳の向日葵の花。

アチット・アバー殿下のロールス・ロイスは門前に着いた。すでに芝生の左右の小閣あたりに居並んでゐた赤い制服の少年軍樂隊は、褐色の頬をふくらませて樂器を吹いた。ホルンの磨き立